

ワクワク留学体験記

Helsinki University of Technology



土山裕介（東京大学）

1. はじめに

修士1年であった2008年の9月から2009年の8月まで、交換留学生としてヘルシンキ工科大学 (Helsinki University of Technology) に滞在していました。ちなみに、つい先日ヘルシンキ工科大学は他の経済系・芸術系の二つの大学と合併して、現在では Aalto University という総合大学となっています。日本での私の専門は機械系・情報系なのですが、留学中は敢えて全く異なった分野の勉強をしてみたいと思い Department of Industrial Engineering and Management という経営系の専攻を選びました。

「なぜフィンランドに行ったの？」というのによく訊かれる質問です。一つの大きな理由としてヘルシンキ工科大学が協定校からの留学生に対して奨学金を提供してくれたという点がありますが、それだけではありません。フィンランドは国際競争力や初等教育のレベルの高さで知られており、また北欧諸国の一員として高福祉国家でもあります。人口500万人程の小国でありながら非常にユニークなフィンランドという国に対する興味が、フィンランド留学を決意する決め手となりました。

2. 大学生活

大学では、Department of Industrial Engineering and Management が主催する International Business Linkage Program (IBLP) というプログラムに参加していました。IBLP は留学生向けの国際ビジネスプログラムで、12の国と地域から来た20人の学生からなる国際的なグループメンバーとともに、経営戦略や多文化マネジメントなどについて学ぶというものです。IBLPでは大学での授業だけでなく多くの課外活動を提供しています。例えば、エクスカーションという形で多くの企業訪問

を行いました。フィンランド国内では世界最大の携帯電話メーカーであるノキアや大手のコンサルティングファームであるデロイトのオフィスを訪問しました。フィンランドを離れてエストニアの首都タリンやロシアのサンクトペテルブルグにも向かい、現地のフィンランド企業のオフィス・工場などを見学しました。また、留学生の出身国の理解を深めるために Nationality Night というイベントを各国の留学生が開催するものこのプログラムの特徴となっています。私は日本企業の現地子会社の協力を得て、寿司パーティーを開催しました。

若干話が逸れてしまうのですが、先ほど述べた合併後の大学名称である Aalto University は、ヘルシンキ工科大学出身の著名な建築家である Alvar Aalto にちなんでいます。冒頭の写真にあるのは Aalto によって建てられた大学のメインビルディングであり、大学のシンボルとなっていました。このような経緯からもわかるようにヘルシンキ工科大学の建築学部は有名で、特に世界的な知名度が高いようです。

従って、さほど多くない日本人留学生のほとんどは建築関連の学部で勉強しており、当時は Department of Industrial Engineering and Management にいる日本人は私一人だけという状況でした。留学当初は、遠い異国の地で専門外の科目を慣れない英語で一人勉強するという、なかなか厳しい状況にありました。最初のセメスターに取った New Venture Development という科目のカナダ人教授の英語が早口で授業が全く理解できなかったときは、どうしたものかと思い悩んだものです。しかしながらだんだんと友人もできていき、英語も上達していき、ビジネス系の学問がどういうものかということがわかっていくにつれて、つらさは消えて大学生活を楽しめるようになっていきました。

3. 研究活動など

大学のプログラムから少し離れた活動も行いました。その一つとして、大学とノキア社との共同調査プロジェクトがあります。秘密保持契約があるためここでプロジェクトの詳細を述べることは差し控えますが、外国の企業の方と一緒に働くという非常に良い経験をする事ができました。バルト海沿いのノキアの美しい本社ビルの中でプレゼンテーションをすることができたのは良い思い出です。

また、IBLPのコーディネータであった先生から研究プロジェクトへのお誘いを頂いて、Assistant Researcherとして文献調査を行いました。プロジェクトの大きなテーマは「グローバルな職場環境におけるモチベーション管理」であり、その中で私の調査テーマは「仮想環境におけるモチベーション管理」でした。Second Lifeのような3D仮想空間をビジネスコミュニケーションの手段として利用しようという動きがあることを前提として、そのような仮想空間におけるモチベーションについて調べるといふものです。極めて先進的なテーマであるためにあまり良い調査結果は出せませんでした。そのような先進的なテーマに取り組むことができたということ自体が有意義であったと思います。

4. プライベート

私は大学キャンパス内の寮に住んでいて、プログラムの友人の多くも近くに住んでいました。お互いの家を頻りに訪れて、時には料理を作ってパーティーをしたり、時には一緒に勉強したりと、とても長い時間を共に過ごしました。議論好きの友達が多く、様々なトピックについてよく語り合いました。喧嘩のような熱い議論もしばしば経て、お互いの文化・宗教・価値観などを含めて深く分かり合うことができました。朝から晩まで顔を突き合わせて、夜は共にご飯を食べてお酒を飲むという日々の中で培われた友情は何物にも代え難いものです。

5. フィンランドについて

フィンランドは非常に自然豊かで美しい国です。ヘルシンキ工科大学は都心からバスで20分程度という立地ですが、緑豊かなキャンパスにはウサギやリスが走り回っていました。

やはりなんと言っても印象的なのは夏と冬の違いです。夏は太陽が燦爛と降り注ぎながらも過ごしやすい気温で、夜は午後10時、11時になっても明るいほどで

すが、冬はその正反対で、日照時間は3時間程で極寒の白銀世界が広がります。フィンランド人は冬に雪が積もっているほうが嬉しいのだそうです。9月頃、初めてその話を聞いたときには理由がわかりませんでした。冬になるとその理由が実感できました。雪は光を反射するので、雪が積もっているほうが明るいのです。日本の穏やかな四季に慣れ親しんだ自分にとっては、フィンランドの季節の変化の度合いはただただ驚きでした。



キャンパス近くの海で撮影
(真冬には海が凍ってしまうため、海上を歩くことができる)

6. おわりに

私は敢えて専門分野とは違う分野で留学をしましたが、結果的にはとても良い経験になったと思います。環境・専門・言語、すべて異なる場所でゼロから始めて専門性や人間関係を積み上げていくという経験を通じて、人間としての幅を広げることができたと感じています。

また、国境を越えて多くの友人を得ることができたのは素晴らしいことだと思います。まだ留学を終えてから半年もたっていないにもかかわらず、既に多くの海外からの友人が日本を訪れてくれました。

日本での専門と直接関係しない留学であったため、学会の学会誌という場にはあまりそぐわない内容となってしまったかと思いますが、このような形の留学もあるのだということを知っていただくと共に、少しでも留学に興味を持っていただければ幸いです。

著者略歴

土山裕介

東京大学大学院情報理工学系研究科修士2年。実空間型三次元ディスプレイの研究に従事。